アリスからの贈り物

岡山県立高松農業高等学校　畜産科学科　２年　坂上　凛

私には大好きな牛がいます。名前はアリス。白髪混じりの頬と何を考えているかわからないシュンとした目がとても可愛いです。毎朝、スタンチョンから顔を出し、元気に餌を食べるアリスに「おはよう」と挨拶をすることが私の日常になっていました。

ある日、アリスが独房に移っていました。理由を先生に尋ねると、「金曜に乳量が激減してて、日曜に獣医さん呼んだら第4胃食滞だって。消化不良で餌が第四胃につまる病気なんよ。でも治療するのにお金もかかるし、治ったとしても乳を搾れん可能性もある。この牛の成績はそんなに良いわけじゃないから明後日には出荷じゃな。」と言われました。卒業するまで一緒だと思っていたアリスが居なくなる。考えたくもないことでした。治す方法があるのに何もできない悲しさ、アリスを1番近くで見ていたのに体調不良に気づけなかった悔しさで、頭の中がいっぱいでした。独房の中、心なしか体の冷たいアリスを撫でながら「自分にできることはなかったのか」と、ずっと考えました。

とにかく行動しよう。そう思った私は、第四胃食滞と診断されてから出荷されるまでのアリスの様子を記録しました。アリスの症状は乳量激減、食欲低下、体温低下、排泄量低下などでしたがよく観察しないと分からないほどの差でした。出荷されたアリスのお肉は全廃棄。解体費、運搬費などが4万円ほどかかりましたが、私は金額では表せられない、もっと大きなものを失ったように思いました。アリスが出荷された後に、「飼育と環境」の授業で食滞の治療法を学びました。散々調べたにも関わらず、初めて知る治療法でした。もっと早く知っていればアリスの負担を軽減できたかもしれません。辛そうなアリスを見るしかできなかった無力さと痛いほどの喪失感が私に火をつけました。

疲れていても、アリスのことを思い出し、心を込めて管理する。「まぁこのくらいでいいか。」という中途半端な気持ちはもうありません。テスト期間も牛のために朝から除糞をし、餌を作る時もミスがないかチェックをしながら進める。全ては「突然、死を迎えてしまう牛をもう二度と出さない」という思いからでした。

梅雨に入り、蒸し暑くなる時期には、牛の体調不良が多くなります。「私にできる暑熱対策をやろう。」そう考えた私は早速、全搾乳16頭の毛刈りを始めました。1日2頭を目標に、毎日牛舎に通いました。暑くなり始める6月下旬に、なんとか全頭の毛刈りを終えることができました。他にも扇風機の掃除、給水器の掃除、餌の作り方の工夫をし、夏に向けての準備を着々と進めていきました。そうすると、今年は去年より気温が高いにも関わらず、6月の一頭あたりの乳量を30kgほど増やすことができました。「私にとって小さなことが、牛にとっては大きなことにつながる。」そうアリスが教えてくれたのだと思いました。

ある日、日課である牛の観察を行っていると夏バテしている牛を見つけました。私は急いで、

体温、食欲の確認をし、平熱を超えていたためすぐに首を冷やしました。今までの暑熱対策が功をなしたのか、牛は順調に回復しました。しかし、牛が回復した嬉しさを上回る悔しさがありました。それはどんなに対策をしても、牛を病気や怪我から守れないという事。先生から個体差の話を聞いたことを思い出しました。元々血統的に体が強くない子や子牛の時に体格差が出てしまう子など、どうしても対策するだけでは防げないこともあるのです。そんな時アリスのことを思い出しました。アリスは、治療する方が赤字になるからと、出荷されました。

飼育者にはどうしても救えない命があるという現実を受け止める必要があるのです。だからこそ、いつ最期がきてもいいように愛情を込めて育てることが飼育者の務めだと思います。牛に幸せでいてもらうことが愛情だと思うのです。今後私が関わる牛たちを病気や怪我から守る対策をするのはもちろん、牛がストレスなく、幸せに過ごせる環境をつくることがアリスの命を無駄にしない唯一の方法だと思うのです。

「アリスは高農を出る最後まで幸せだったのかな。」そんな想いから私の目標ができました。それは「生まれてきてから最期まで、牛がストレスなく、幸せに過ごせる環境」をつくること。家畜とはいえ、ひとつの命。愛玩動物の命は人々にとって身近である一方、経済動物の命は、身近なようでまだまだ身近ではないと思います。しかし、どれも同じ大切な命だと私は思います。だからこそ経済動物を飼育する私たちが、最後まで愛情、責任を持ち育てるのです。

そして、とうとう途方もない「酪農の夢」が私の頭に芽生えました。私は将来酪農をする。私が目指す酪農は、人間中心ではなく牛中心の酪農。経済性を追求し、大規模化や高能力化のみを求める酪農ではありません。もちろん、経営として酪農を行うには、経済的な観点が不可欠なことは高校の授業でもしっかりと学び知っているつもりです。そのうえで、牛たち中心の酪農を行いたいのです。

この頃スーパーに行くと、「○○さんの野菜」と写真入りのポップの下に、みずみずしい野菜が並び、「生産者の顔が見える野菜」として販売されています。私は、それを「坂上さんの牛乳」ではなく「アリスの牛乳」といったように、それぞれの牛たちの写真を載せた牛乳瓶やパックで販売したいと思います。個体別に搾乳し市乳化するのです。成分無調整は当然として、ノンホモ・低温殺菌にこだわります。コストと労力がとてつもなく上昇することはわかっています。そこで、作物や果樹などで行われているオーナー制度に取り組みます。それぞれの乳牛たちが子供のころからオーナーを募集し、その牛が生産した牛乳や乳加工品を送ります。趣旨に賛同してもらえる会社や学校・レストラン等とオーナー契約を締結し、社員食堂や学校・レストランに牛乳を提供していきます。もちろん、それぞれの牛ごとに契約するのです。定期的にオーナーとなった人たちと牛との交流会も開催したいと思います。乳加工施設も併設し、それぞれの牛乳だけでなく、チーズやアイスクリーム等も生産していきます。

牛たちの健康を維持し、美味しい牛乳生産のために餌にもこだわります。また、搾乳時間と回数もそれぞれの牛ごとにベストな状態を見つけて行うのです。労力面の負担軽減の為ICT技術もフルに活用していきます。こうしていけば何百頭の中の1頭ではなく、それぞれの牛に目を向

けた酪農を実現できるのではないでしょうか?途方もない夢ですが、私はその実現に向けて進んでいきます。

「もっと牛を幸せにする方法を見つけたい!」という思いは日に日に強くなっています。

この途方もない夢を実現するために私は高校を卒業したら酪農大学校に進学し、牛が幸せに過ごせる飼育法を研究します。アリスのおかげで私の酪農家になりたいという夢は明確な目標に変わりました。そして更なる夢も生まれました。

アリスからの贈り物は、飼育者としての覚悟と情熱、そして未来への道しるべでした。

家畜としてのアリスは「成績が悪く病気で廃棄した牛」だったのかもしれません。しかし、私にとってアリスは、たくさんの学びをくれた一生心に残る牛です。牛舎にアリスがいなくても心の中でアリスは生きています。アリスの教えを胸に、私はこれからも成長し続けます。アリス。ありがとう。